



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	地域アイデンティティとランドスケープデザインの構築
Author(s)	片桐, 保昭
Citation	北方的-北方研究の構築と展開 予稿集, 12-12
Issue Date	2006-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/26432
Type	journal article
File Information	hoppo2006.pdf



地域アイデンティティとランドスケープデザインの構築

片桐保昭（北海道大学大学院文学研究科 歴史・文化論講座）

日本の公共事業において、ランドスケープデザインはここ10年ほどの間に市民権を得てきた分野である。具体的には公園緑地、街路、橋梁、河川敷、公共建築物といった施設を設計する分野で、風景全体の美質を向上させる意味合いが込められており、近代科学による建築土木の画一性への反省から積極的に取り入れられつつある。特に北海道は自然条件や社会条件が、日本の他の地域と異なっており、この分野において独自性を発揮し得ると見なされることが多い。



当該地域に出土した化石にちなんで、恐竜をモチーフにデザインされた、わかりやすいが奇妙な意匠の街灯

しかし逆に公共建造物に奇妙な形態のものが多くつくられることが問題にされることがある。どこが奇妙なのか、なぜ奇妙なのか、なぜそうなるのだろうか。

この点からランドスケープデザインの現場を整理すると次のようになる。美醜のような客観的に評価しにくいことは評価を避けられる。また公共施設ゆえ、万人が納得しやすい（わかりやすい）形態として表す必要があるが、このとき住民も含め、行政担当者やデザイナー自身が抱いている違和感は自己規制される（そもそもこのような違和感は口に出して説明し難い）

結果としてデザイン作業は知名度のあるモチーフの再生産に終始し、そのモチーフの特徴が強調された奇妙なものになる。つまりランドスケープデザインの作業過程において、風景の価値の問題は施設形態の象徴性の問題へ変質するのである。

要素還元的な近代科学の考えでは「施設」は風景の要素の一つであり、個々の要素の質を向上させることは全体を向上させることだ。しかし風景の中の「要素」を特定できない限り、行政システムにとってその「要素」は風景の中には存在し得ない。「要素」として特定できないそれは、口に出して説明しにくい、風景全体の中での「違和感」のかたちで一人一人の主体に感じられている。

これは単一のモノを対象とするのではなく、あくまで風景全体の経験のなかで感じられる性格のものである。且つ亦、単一のモノを扱うのとは異なるが、やはり「文化」と呼ばれる領域の問題でもある。

地域の風景が呈する独自の美質は、近代科学の要素還元的な手法では対象化することは難しい。それ故「地域」「文化」「アイデンティティ」などの言葉で表されてきた。これらをランドスケープデザインに持ち込むと、その過程は単一の「施設」というモノをつくることに終始する。つまり近代行政の枠の中において、利便性や住民の望む良い「施設」を追求すればするほど、風景の中での「施設」のわかりやすさは強調され、意匠モチーフの形態的特徴が肥大化した奇妙なものとならざるを得ない。



このとき抱かれる違和感は、ある地域や時代における、イメージ全体の知覚の構築と再生産における実践の探求において一つの切り口となるものであろう。

北海道の農村部につくられたこの「施設」は周囲の景観の中で非常に目立ち、象徴的であるが、公式には、住民の声を取り入れて自然と景観に配慮して設計されたものである。どちらにせよ当事者にも住民にとっても正しく、同時に違和感も感じられている。